

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制 自己点検・自己評価委員会

(責任者名) 吉澤 結子
 (役職名) 学長 自己点検・自己評価委員長

② 自己点検・評価体制における意見等

| 自己点検・評価の視点 | 自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等 |
|---------------------------|---|
| 学内からの視点 | |
| プログラムの履修・修得状況 | <p>「情報リテラシーⅠ」および「情報リテラシーⅡ」においては、全学科で1年生に対し、卒業要件として履修する必修科目となっている。 令和7年度の単位修得率は1年生の98.0%となった。</p> |
| 学修成果 | <p>本学を志望する学生は、学部・学科の特性上、「数理・データサイエンス・AI」や「PC操作」などの内容をこれまで避けてきた学生が多いと考えられる。しかし、2つの科目それぞれの終了後に行ったアンケート結果から、学生が取得を目指す免許や資格に関連した実データや実課題を用いて学習を進めることで、学生の興味・関心の持ち方に変化が見られ、意欲的に学ぶ姿勢が多く確認された。「社会におけるデータ・AIの利活用」について、『興味・関心を惹く内容であったか』と『授業内容を理解できたか』という質問で、興味関心を持った・理解できたという肯定的回答が、「情報リテラシーⅠ」において95%以上、「情報リテラシーⅡ」において85%以上を占めた。 これらの結果から、本学のように工学系ではない学部・学科においても、学科の特性に即した具体例を提示し、学んだ内容を学生自身がPC上で逐次確認できるような学習方法は、良好な教育効果をもたらすと考えられる。</p> |
| 学生アンケート等を通じた学生の 内容の理解度 | <p>「情報リテラシーⅠ」および「情報リテラシーⅡ」では、第15回授業終了時に無記名式のアンケート調査を実施した。授業内容に関しては、授業の内容ごとに『興味・関心を惹く内容であったか』と『授業内容を理解できたか』の2項目について回答を求めた。さらに、学生の到達度として、『PCやOSの仕組みを理解し、PCを自在に操作できるようになったか』と『数理・データサイエンス・AI等に高い関心を持ち、データを適切に活用する基礎的な知識や技能が身についたか』の2項目を設定した。</p> <p>いずれの項目も、「はい」を4点、「いいえ」を1点とする4段階評価で回答を得た。</p> <p>【情報リテラシーⅠ】 『授業は興味関心を惹く内容であったか』の質問に、授業ごとの評価を総合して96.3%が4または3の肯定的回答を示した。『授業の概要を理解したか』の質問についても、授業ごとの評価を総合して、96.0%が4又は3の肯定的回答であった。 また学生本人の到達度について、『PCやOSの仕組みを理解し、PCを自在に操作できるようになったか』の質問に対し、91.0%が肯定的回答を示し、『数理・データサイエンス・AI等に高い関心を持ち、データを適切に活用する基礎的な知識や技能が身についた』の質問では、88.0%が肯定的回答を示した。</p> <p>【情報リテラシーⅡ】 『授業は興味関心を惹く内容であったか』の質問に、93.0%が肯定的回答を示し、『授業の概要を理解したか』の質問については、肯定的回答が86.2%と高い値を示した。 また学生本人の到達度について、『PCやOSの仕組みを理解し、PCを自在に操作できるようになったか』の質問に対し、90.4%が肯定的回答を示し、『数理・データサイエンス・AI等に高い関心を持ち、データを適切に活用する基礎的な知識や技能が身についた』の質問では、84.0%が肯定的回答を示した。</p> |

| 自己点検・評価の視点 | 自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等 |
|-------------------------------------|---|
| <p>学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度</p> | <p>学生アンケートの回答について以下の通りとなった(一部、抜粋)。設問に「後輩等他の学生への推奨度」はなかったが、この科目への高い満足度が伺えることから、後輩等へも強く推奨するものと推察される。</p> <p>< 知識・技能 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・パソコンの知識に乏しい私だったが、この授業で自信をもって操作できるようになった。 ・実際にパソコンに触れながらの説明が多かったため、理解しやすかった。また、教わった技術がどこで、どのように活用されているか具体例をあげながらの内容だったため理解が深まった。授業を受け、数理・データサイエンス・AIについて知り、知識・技術が成長できたと思う。 ・入学した時に比べてパソコンでできることが多くなった。 ・高校で学んでこなかった内容を学べ、できなかった操作ができるようになった。 ・毎回パソコンを使った作業の時間があり、楽しく学ぶことができた。 <p>< 興味・関心 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・AIなどについての知識をもっと身につけたいと思った。 ・AIなどをうまく活用していく必要があることがわかった。 ・興味の湧く内容が多くて楽しかった。 ・AIを活用する能力だけでなく、AIの情報を確認し、修正する能力(知識・技能)も必要であることを学んだ。 ・AIの使い方をもっと学びたいと思った。 <p>< その他 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・生成AIについて授業で学べることはとても良いなと思った。 ・いまよく使われている生成AIについて、改めて授業で学べることはとても良いと思った。 ・AIは勉強の時や文章作成に困ったときに活用していたので、授業の内容はとても興味深かった。今後もAIは発展していくと思うが、仕事が奪われるなどのリスクもあるため、メリットやデメリットを学び、うまく活用する方法を身につけるべきだと思った。 ・AIなどをうまく活用していく必要があることがわかった。 <p>否定的な意見を記述した学生は一人もおらず、受講した学生の高い満足度を伺い知ることができる。このことから、後輩に対しては、受講を推奨してくれるものと推察する。</p> |
| <p>全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況</p> | <p>前期開講の「情報リテラシーⅠ」と後期開講の「情報リテラシーⅡ」は卒業必修科目であり、令和7(2025)年度は1年生全102名が履修している。</p> <p>本学では免許や資格の取得を目指す学生が多いため、授業では可能な限りその分野に関連した実データや実課題を用いて学習を進めた。その結果、学生が興味を持って主体的に取り組む姿が多く見られた。</p> |

| 自己点検・評価の視点 | 自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等 |
|---|--|
| 学外からの視点 | |
| 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価 | 令和7年度から実施しているプログラムであるため、本教育プログラムの修了者が今後、本学を卒業した後に、卒業生アンケートなどを通じて、進路、活躍状況、企業などの評価について把握する計画としている。 |
| 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見 | <p>求人のために本学を訪れた企業や施設の担当者に対し、本授業のシラバスを提示しながら聞き取り調査を行った。その結果、一部の企業ではマーケティング調査、会議録の作成、文章作成などの事務処理において生成AIを活用していることが分かった。一方で、多くの企業では生成AIの活用がほとんど進んでいない状況であった。</p> <p>これは、本学への求人の多くが栄養士系や保育士系が多いことが要因と考え、これらの職域では生成AIを利用する場面が比較的限られていることが考えられる。しかし、そのような状況にあっても、多くの担当者が「今後は少しずつ理解を深めていきたい」と述べており、「数理・データサイエンス・AI」について大学で体系的に学んでいくことへの期待が示された。</p> |
| 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること | <p>本学で取得可能な免許や資格に関連する実データを分析することで、学生が将来の働く姿をイメージさせることができ、AIの活用の紹介の場面では歓声が上がることもあり、楽しみながら学ぶ様子が見られた。</p> <p>また、様々な現場におけるデータ活用の事例やAI、デジタルディバイドについて解説した際には、学生それぞれがデータサイエンスに対する理解が十分でないことを自覚する機会となった。さらに、実データを処理して分かりやすい形で表現する課題に取り組む中で、自身のPC操作の未熟さを認識し、学習の意義を改めて確認する姿も見られた。</p> |
| <p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p> | <p>データサイエンスについては、まず学生自身が興味や関心を抱くことが重要であると考えている。そこで、学生が将来目指す職種に関連する実データを用いて解析を進め、他の教科や学外実習とも結びつくよう工夫している。</p> <p>また本授業では、学生がノート型PCを持参して授業に臨むことを基本としている。そのため、空き時間等に学生同士がPCを囲んで談笑する姿をよく目にする。こうした環境により、PCの話題が増え、自然と触れる機会が増えるため、疑問を抱きやすい状況が生まれている。その結果、PCの操作等に関して質問に訪れる学生も少なくない。</p> |